

擬似初心者の自由英作文に見る英語運用能力

— 中学校3年生・大学1年生上位者との比較 —

中村朋子 (広島国際大学)

中尾有香 (広島国際大学)

畑野喜信 (広島女学院中学・高等学校)

1. はじめに

本研究は、教室環境で6年間英語の授業を受け、目標言語の知識をある程度持っているが、熟達度が低く学習効果の上がない大学生英語熟達度下位者を対象としている。彼らを擬似初心者 (False Beginners) と呼び、そうした学習者を対象にした英語学習支援の方法を確立することを研究の最終目的としている。本稿はその基礎研究の1部である。

擬似初心者は英語の学習につまずいた学習者集団の典型を示している。彼らのつまずきの要因を、これまでは言語学習の第一歩である単語情報処理に限定し検証してきた(中村 2000, 2001, Nakamura & Matsuoka 2003, Nakamura et al. 2004)。これらの研究から、擬似初心者は、文字と音韻を手がかりにして、有意味単語を学習する単語認知のレベルでつまずいていることを実証してきた。順調に学習発達段階を踏めば、このつまずきは解消されるものであり、そうでない場合は、学習者は擬似初心者になる可能性があることを、大学1年生熟達度上位者、下位者 (以降、擬似初心者)、中学3年生上位者を被験者としたデータ分析から明らかにした (Nakamura 2001)。

過去10年間の国内の主要な、英語教育関係の紀要を調査した限りでは、擬似初心者と中学3年生上位者のように、学習年数が異なるにもかかわらず、熟達度テストの結果に差がない2つの日本人 EFL 学習者群を比較した研究例はない。母語による読みの発達に関する研究に関して、英語圏で Perfetti & Hogaboan(1975), Backman et al.(1984)などが、学習年数の違う学習者群の読解力比較をしている。日本語習得は、小学校1年生から6年生までの国語学力到達テストを比較した天野・黒須 (1992)、読書力調査で学習年数とは異なる読書学年という評価を提案した三好 (1993) などがある。本研究の被験者である、擬似初心者は第二言語習得に関して slow learners、中学3年生上位者は quick learners の典型であると言ってよいだろう。

本稿では熟達度テストの結果から、比較的順調に英語学習が進んでいる大学1年生熟達度上位者のデータも加え、これら3つの学習者群の自由英作文表現データから、使用単語の特徴とTユニットの検定による文章成熟度を比較考察する。

2. 実験計画

英語教師は、「擬似初心者はいかに英語ができないか」を議論する機会が多い。しかし、擬似初心者が、6年間の学校教育を受けたあとに「どれだけの英語を実際に使えるのか」を客観的に知り、今後の指導に役立てるために、実験計画を立てた。大学1年生上位者、擬似初心者と中学3年生英語熟達度テスト上位者と同じ課題を出し、被験者群の作文の使用語彙と統語面

での発達度を比較した。

2.1 被験者

- ① 大学1年生英語熟達度上位者 (n=27)
- ② 擬似初心者 (n=49)
- ③ 中学校3年生英語熟達度上位者 (n=49)

2.2 課題

- (ア) 大学1年生英語熟達度上位者と見られる43名は実用英語検定準1級の長文問題(2002年度第3回)2問をテスト時間30分で解答する。
- (イ) 擬似初心者と見られる88名と、中学3年生上位者69名は実用英語検定3級と準2級の長文読解問題(1998年秋)を各2問ずつ、テスト時間30分で解答する。
- (ウ) 自己紹介文"Let Me Tell You about Me."を10分間で書く。

2.3 準1級と英検準2・3級読解テストのレベル比較

熟達度テストに使用した実用英語検定試験は、日本国内の教室環境で英語を学習してきた被験者にとって、一番なじみやすい英語熟達度テストであると判断した。また、教育的配慮から3級、準2級・準1級の長文読解テスト問題を各被験者群のレベルに合わせて使用した。大学擬似初心者88名、中学3年生69名の英語検定読解テストの結果から、平均点がほぼ同じになるように49名を選び、2つの被験者群を作った。両群のテストの結果に有意差はなかった。

($t(96)=0.035$, n.s.) また、大学1年生熟達度上位者と見られる被験者43名のテスト結果を参考に、上位27名を選び、大学1年生上位者群とした。

準1級と英検準2級・3級混合の両テストのレベルに差があるかどうかを確認するために可読性の検定を行った。

表1 可読性の検定

可読性の検定	英語検定準2・3級混合	英語検定準1級
受動態出現率	9%	14%
Flesch Reading Ease	74.5	44.4
Flesch-Kincaid Grade Level	5.8	11.5

フレッシュとフレッシュキンケイドによる2つの可読性の検定である。清川(1992)は、英文の難しさの程度を判定する基準を次のように数値化している。

表2 フレッシュの読みやすさのレベル

フレッシュの読みやすさのレベル

0-30	大変難しい	70-80	やや易しい
30-50	難しい	80-90	易しい
50-60	やや難しい	90-100	大変易しい
60-70	標準的		

清川(1992)

この指標によれば、熟達度テストに使用した準2級・3級混合のテキストは「やや易しい」、準1級は「難しい」レベルである。一方、フレッシューキンケイドによる可読性の検定は、数値が高いほど難解な文章であることを示す。以上2つの検定で得た数値からも、英語検定準1級は準2級と3級の混合テストよりも高度な熟達度を要求するテストであることがわかる。従って、大学1年生熟達度上位者群と擬似初心者群のレベルが一部で重なることはありえないと判断した。

3. データの分析

3.1 比較項目

3つの被験者群が10分間に書いた自由英作文のデータを使い、次の3項目について、比較した。

- ① 使用語数と異語数の比較
- ② Tユニットで使用した単語数
- ③ 使用接続詞の種類と頻度の比較

3.2 使用語数と異語数の比較

表3 使用単語に関する記述統計量

	中学3年生 (n=49)		大学1年生下位 (n=49)		大学1年生上位 (n=27)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
使用単語数	68.612	19.415	42.102	21.049	139.37	37.544
異語数	47.245	11.778	30.449	12.488	77.63	14.79

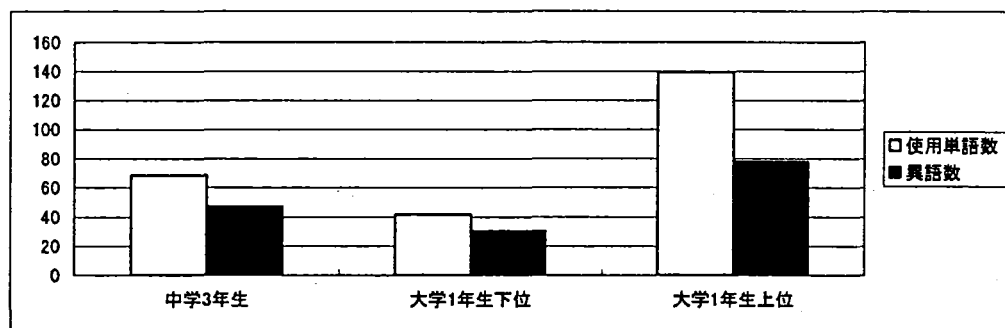


図1 使用単語数と異語数の比較

図1を見ると、3つの被験者群の使用単語数と異語数は、学習者群としての典型的なパターンを示している。3つの学習者群の使用単語数と異語数に関し、水準数3（熟達度）の1要因による分散分析をした結果、主効果の検定で、使用単語数・異語数共に有意差が出た（使用単語数： $F(2, 122)=129.572, p<0.000$ ；異語数： $F(1, 122)=116.181, p>0.000$ ）ので、下位検定を行ったところ、3つの被験者群それぞれに有意差が出た（付表1、付表2）。

この分析結果から、使用単語数、異語数共に、大学1年生上位、中学3年生上位、擬似初心者群の順で数値が大きいと云える。単語レベルで、擬似初心者は他の2つの被験者群に比べて、使用できる単語数が少ない。運用する自信のない単語の使用を回避する方略が見られる。また、

異語数は被験者の語彙の多さを示すもので、教師間でもよく話題になる擬似初心者の語彙力の少なさをこの数字が実証している。次に、統語レベルでの運用状況を検証するために T-ユニットによる文章成熟度を比較した。

3.3 T-ユニットによる文章成熟度比較

本研究のデータ分析に使用した T-ユニットは、英語母語話者が書いた作文の統語発達を測る尺度としてハントが考案した (Hunt1966)。従属節を含む主文を 1 ユニットとし、文中の誤りのない節の数の比率を見る方法で、これまでに、母語獲得・第二言語習得共に、種々な目標言語でこの分析方法が試みられてきた。英語の母語獲得では Loban(1976) が幼稚園児から高校 3 年生までの言語の発達を T-ユニットで分析している。Bardovi-Harlig and Bofran (1989) は、母語の違う上級英語学習者の英作文の分析に T-ユニットを使用し、母語が異なっても第二言語習得の統語発達の形態は同じであることを実証している。また、学習者の書き言葉だけでなく、話し言葉の分析にも使用されている(林 1983、小泉・山内 2003)。したがって、T-ユニットはデータ分析の一方法として、一定の信頼度を得てきたと言える。

一方、Mandeville (2002) は、節の数を比較するよりも 1 つの T-ユニットに使用された単語数を比較するほうが信頼度は高いとしている。日本人 EFL (English as a Foreign Language) 学習者、特に英語の苦手な大学生の自由英作文では、誤りのない節は皆無であると言ってよく、彼らの実態に即して T-ユニットを活用するために、以下の手続きを行い、分析を行った。

3.3.1 文章表現の分析方法

- ① 単語だけの羅列など、文になっていない部分を削除し、使用語数から差し引いた。
- ② 等位接続詞による重文は 2 つのユニットとして換算した。
- ③ 副詞節、名詞節、形容詞節などを含む埋め込み文は 1 つのユニットとして換算した。
- ④ Because など従位接続詞で始まる節だけの文は、1 つのユニットとした。
- ⑤ ①を文中のユニット数で割り、2 つの学習者群の平均数値を比較した。
- ⑥ 文中の統語的エラーは、学習者言語 (Learner Language; Ellis 1994) と捉え、そのままにした。綴りの間違いは修正した。

3.3.2 統語に関する分析結果

表 4 統語に関する記述統計量

	中学3年生上位 (n=49)		擬似初心者 (n=49)		大学1年生上位 (n=27)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
T-ユニット内語数	5.755	0.792	5.487	0.999	7.579	1.458
等位接続詞使用頻度	1.184	1.004	0.837	1.184	4.556	2.78
従位接続詞使用頻度	0.735	0.898	0.429	0.857	3.593	2.182

最初に、1 つの T-ユニット内に使用された単語数を比較した。3 つの被験者群の平均値は、中学校 3 年生上位者群は、5.755 語、大学 1 年生下位者群は、5.487 語、大学 1 年生上位者群は、7.579 語であった。

水準数 3 の 1 要因 (熟達度) の分散分析では、主効果の検定で被験者間に有意差があったので ($F(2, 122)=36.910, p<.000$)、下位検定をしたところ、大学 1 年生上位者が T-ユニット内

の使用単語数が一番多く、中学3年生と擬似初心者群の間には有意差はなかった(付表3)。

従って、これまでの量的分析をまとめると、擬似初心者は中学3年生上位者ほど多くの単語は使えないが、文章成熟度は、ほぼ同じであることがわかった。Tユニットによる文章成熟度は、1つのTユニットが、埋め込み文といわれる補文を含んでいるかどうかが決め手になる。従位接続詞を使用して節を作ることができれば、Tユニット内の単語数は増加する。等位接続詞を使用して重文を書くと、Tユニットは2つに換算され、単語数は減少するしくみになっている。この観点から、擬似初心者の文章表現の特徴を知るために、Tユニットの節の種類について質的分析をした。

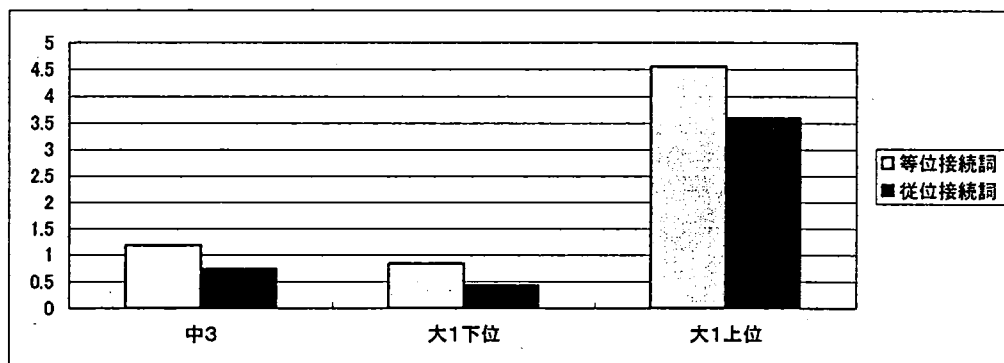


図2 接続詞使用頻度比較

使用した接続詞を見ると、等位接続詞はどの学習者群も従位接続詞より使用頻度が多い(図2)。とりわけ大学1年生上位者は頻繁に使っている。水準数3(熟達度)×水準数2(接続詞の種類)の2要因の分散分析をしたところ、熟達度と使用した接続詞の種類両方に有意差が出た($F(2, 122)=100.293, p<0.000$; $F(1, 122)=13.487, p<0.000$)。下位検定では、中学3年生と擬似初心者の接続詞使用頻度に有意差が認められなかった(付表4)。

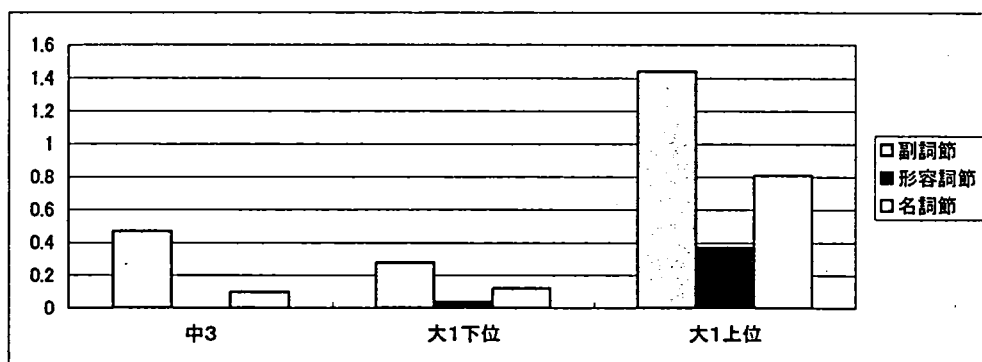


図3 節の種類比較

次に、文章の複雑さを示す、埋め込み文の種類を比較した(図3)。本実験の被験者は副詞節を形成する従位接続詞としてbecause, since, if, when, thatを使用していたが、節の中でも、比較的副詞節は使い易いようである。3つの被験者群の副詞節接続詞使用状況は図4

のグラフのとおりである。副詞節の接続詞も大学1年生上位者群で一番使用頻度が高い。大学1年生上位者群は文章表現のために、等位、従位接続詞共に、よく使用し、必要な時に取り出して運用できる接続詞の引き出しが多いことがわかる。中学3年生上位者は自由英作文の課題を出した時期にちょうど現在完了形を学習中で、since で始まる副詞節を他のどのグループよりも頻繁に使用した。学習したことをすぐ運用できる柔軟性が彼らには備わっているようである。一方、擬似初心者は、完了形と一緒に使用しなければならない since の使用は、ハードルが高いようで、使用頻度はゼロであった。擬似初心者は、埋め込み文の中でも形容詞節を形成する接続詞の使用にとりわけ自信がなく、語彙の場合と同じく、統語レベルでも、英語を表出しなければならない場合に、習熟できていない文法項目については、その使用を回避する方略を使う傾向がみられる。中学校3年生は3年生の後半に関係節が導入される予定で、この実験を実施した5月の段階では未学習であったため、形容詞節の使用はなかった。擬似初心者は、because が従位接続詞の中でも一番使いやすいようだ。

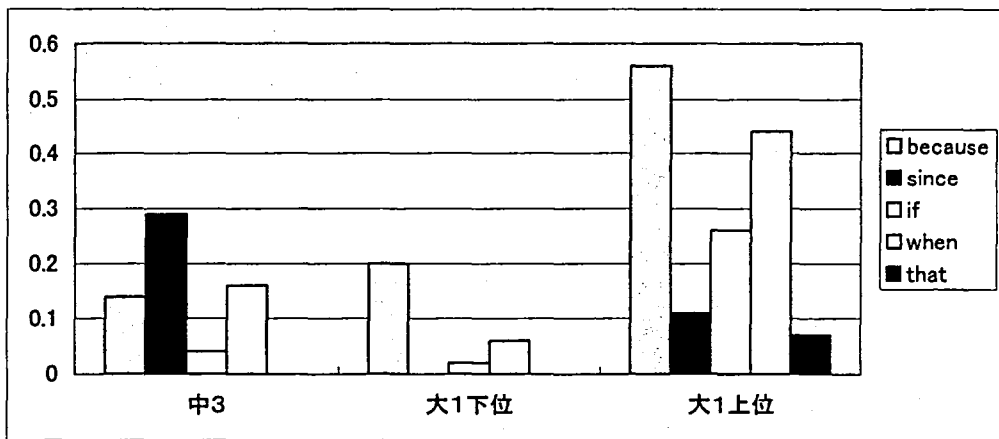


図4 副詞節接続詞の使用頻度比較

4. 教育への応用

この分析結果を、擬似初心者対象のライティング授業に応用する試みを、2004年4月から始めた。授業の目的は、2つある。一つは、10分間のTimed Writingで、擬似初心者が、できるだけたくさん英語を表出できるようになることを目指す。擬似初心者は運用する自信のない単語は、使用を回避する傾向にあることから、Timed Writingの前に単語を思い出すアクティビティーを取り入れた。必要ならば辞書の助けを借り、与えられた自由英作文のタイトルに関して連想する単語を枝葉のように書いていく、クラスタリングを5分間、Timed Writingの前に行う(中尾、中村2004)。Timed Writingの時には、辞書は使わない。間違いを恐れずたくさん英語を使うことが目的のTimed Writingに平行して、まとまったエッセイを仕上げるのが、ライティング授業のもう一つの目的である。その編集段階で、Timed Writingで書いた短文をつなぎ合わせ、一つの長い文章にする作業を取り入れる。擬似初心者への簡単なアドバイスで、彼らの文章表現を改善できる点もある。たとえば、擬似初心者はand, but, becauseを比較的よく使う。しかし、彼らの文章表現の特徴は、これらの接続詞を単文の文頭に使用することである。

被験者による作文例: My name is E.S. I'm called S. by everybody. I'm from K. High School in Hiroshima. My birthday is December 27th. I have four family, father and

mother and small sister and I. And we have a cat. He is very clean white. I think that I want to make many friends. Because I want enjoying school life with many friends. But I have a few friends now. I'm very sad.

英語ライティングの指導では、書き直しのための編集作業の時に、従来の文法事項の説明というよりは、より良い英語表現を目的とした、文章のつながりの指導を取り入れると、かなり改善できると思われる。

従って、実験結果のライティング授業への応用は2つのステップを踏むことになる。最初は、間違いを恐れず自由に英文を表出できるように指導すること、次の段階では、節、特に形容詞節の使い方を復習することである。また、文法的な間違いについては、教師の付けた記号をもとに、学習者が自力で修正できるようにした。

5. おわりに

中学3年生上位者と擬似初心者群は、両群の平均点がほぼ同じになるように各49名を選んだ。客観テストの平均値に有意差がないにもかかわらず、擬似初心者の英語を運用する能力は、一様ではない。一般に、擬似初心者の英語能力は、客観テストの点数の低さで議論することが多い。しかし、自由英作文の使用単語数、異語数、文章表現成熟度に関して分析を行った結果、使用単語数と異語数は共に、中学3年生上位者よりも数値が低い一方で、T-ユニット内の単語数は中学3年生上位者と同等である。また、この結果から、擬似初心者は、ある程度統語の知識の運用があるかに見えるが、質的分析では、使える節の種類に片寄りがある。実際の指導では、学習者の個人差も考慮に入れた、よりきめの細かい分析による学習支援が必要ではないかと私たちは考えている。自分の弱点を十分に認識し、時には過度に意識しすぎて、擬似初心者は、10分間に使える単語数が他の2つの学習者群と比べて格段に少ない。英語ライティング授業でのリメディアル教育で最初に行ななければならないことは、彼らが英語を学習する際に抱いてきた不安感を解消することではないだろうか。教育への応用の項でも述べたように、擬似初心者を対象にした英語ライティング授業では、正しい英文を書かなければならないという彼らの思い込みを解消するために、誤りを訂正せず、自由に書かせることからスタートしたい。そのためには、これまでの実験で明らかになった彼らの綴り習得の弱点(中村2000, 2001, Nakamura & Matsuoka, 2003, Nakamura et al. 2004)や文章表現の成熟度の低さに拘らず、とりあえずは、たくさん英文を表出させることから始める授業の試みの計画を立てた。次の実験では、授業実践での彼らの学習効果を検証することとした。

参考文献

- Backman, J., Bruck, M., Hebert, M., & Seidenberg, M. (1984). Acquisition and use of spelling-sound correspondences. *Journal of Experimental Child Psychology*, 38, 114-133.
- Bardovi-Harlig, K. & Bofman, T. (1989). Attainment of syntactic and morphological accuracy by advanced language learners. *Studies in Second Language Acquisition*. Vol.11, pp.17-34.
- Crookes, G. (1990). The Utterance, and Other Basic Units for Second Language Discourse Analysis. *Applied Linguistics*, Vol. 11, No. 2, pp.183-199. Oxford University Press.

- Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. New York: Oxford University Press.
- Hillocks, G.Jr., & Smith, M.W. (1991) Grammar and usage. In J.Flood Jensen, D. Lapp, and J.R. Spire (Eds.), *Handbook of Research on Teaching English Language Arts*. (pp.591-603). New York: Macmillan.
- Hunt, K. W. (1966). Recent measures in syntactic development. *Elementary English* 43, 732-739.
- Loban, W. (1976). *Language Development: Kindergarten through Grade Twelve* (Research Report 18). Urbana, IL: National Council of Teachers of English.
- Nakamura, T, & Matsuoka, H. (2003). The effects of a CALL based task on false beginners' acquisition of irregularly spelled words in English. *Annual Review of English Language Education in Japan*. Vol. 14, 211-219.
- Nakamura, T, Uno, A., & Szirmai, M. (2004) A comparison of English and Kanji Lexical processing from sound to print among EFL false beginners. 『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』 Vol. 1, 1-19.
- Mandeville, F. (2002). Syntactic Maturity, and T-Units
<http://www.ci.swt.edu/faculty/mandeville/RDG6330/HuntsT-units.html> (2004年11月27日)
- Perfetti, C.A., & Hogaboam, T.W. (1975). Relationship between single word decoding and reading comprehension skill. *Journal of Educational Psychology*, 67(4), 461-469.
- 天野清・黒須俊夫 (1992) 小学生の英語・算数の学力 秋山書店
- 稲田俊明 (1989) 「補文の構造」(新英文法選書第3巻) 大修館書店.
- 清川英夫 (1992) 「リーダビリティと読書教材」『英語教育』12月号 大修館書店.
- 小泉敏江・山内逸美 (2003) 「日本人中学生のモノログにおけるスピーキングの特徴」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』17, 33-44.
- 中尾有香・中村朋子 (2004) 「擬似初心者を対象にした自由英作文指導—brainstormingの効果について」(第30回全国英語教育学会長野研究大会自由研究発表資料)
- 中村朋子 (2000) 「日本人英語学習者の語彙処理の方法」『日本教科教育学会誌』第23巻, 2, 19-28.
- 中村朋子 (2001) Japanese EFL learners' cognitive processing of English regular and irregular Words. 『広島大学教育学研究科紀要』第一部 50, 147-156.
- 三好公代 (1993) 中学生の読書力に関する若干の研究(1) ノートルダム清心女子大学紀要 国語・国文学編17 (1), 23-31.

付表 1 主効果における多重比較 (ライアン法)

pair	r	nominal level	t	p	sig.
大1上位- 擬似初	3	0.0166667	16.005	0.0000000	s.
大1上位 - 中3	2	0.0333333	11.643	0.0000000	s.
中3 - 擬似初	2	0.0333333	5.175	0.0000009	s.

MSe=642.987039, df=122, significance level=0.050000

付表 2 主効果における多重比較(ライアン法)

pair	r	nominal level	t	p	sig.
大1上位 - 擬似初	3	0.0166667	15.243	0.0000000	s.
大1上位 - 中3	2	0.0333333	9.817	0.0000000	s.
中3 - 擬似初	2	0.0333333	6.438	0.0000000	s.

MSe=166.766229, df=122, significance level=0.05000

付表 3 主効果における多重比較 (ライアン法)

pair	r	nominal level	t	p	sig.
大1上位 - 擬似初	3	0.0166667	8.236	0.0000000	s.
大1上位 - 中3	2	0.0333333	7.181	0.0000000	s.
中3 - 擬似初	2	0.0333333	1.251	0.2131802	n. s.

MSe=1.123326, df=122, significance level=0.050000

付表 4 主効果における多重比較 (ライアン法)

pair	r	nominal level	t	p	sig.
大1上位 - 擬似初	3	0.0166667	12.194	0.0000000	s.
大1上位- 中3	2	0.0333333	11.037	0.0000000	s.
中3 - 擬似初	2	0.0333333	1.373	0.1723981	n. s.

MSe=2.773082, df=122, significance level=0.050000